〈調査報告〉

ハンセン病患者の妊娠・出産及び ハンセン病未感染児童の養育に関する一考察

—ハンセン病療養所奄美和光園、奄美和光園教会と乳児院名瀬天使園との連携から—

小倉 常明

Abstrsct

優生保護法は、1948 年から 1996 年まで存在していた優生学的断種手術、中絶、避妊を合法化した法律であった。この時代には、重度の障がいを持っていたりする者は、不妊・中絶手術を受けさせられたりした。ハンセン病患者も、同法に基づき、半ば強制的に手術を受けさせられていたりした者もある。

現存する 13 の国立ハンセン病療養所でも、同様の手術が強制的に執り行われていた。鹿児島県の奄美大島にある奄美和光園（以下、和光園）では、妊娠、出産が認められ、産まれた子どもをハンセン病の後遺症により、養育することが困難な患者から預かり、和光園の職員が養育したり、専用の乳児院名瀬天使園（以下、天使園）が設けられた。本報告では天使園創設までの状況について検証してみた。

キーワード：ハンセン病療養所、奄美和光園、奄美和光園教会、名瀬天使園、ハンセン病未感染児童養育

１．はじめに

他のハンセン病療養所では、強制避妊手術等が施され、認められていなかった妊娠・出産が、奄美大島の和光園においては認められていた。そのことについては、先行研究を含め、すでにおおまかではあるが確認している。[1)]

本研究においては、和光園での職員らによるハンセン病未感染児童の職員らによる私的養育から、児童福祉施設である乳児院天使園創設にいたるまでの経緯に関して確認していくこととしたい。

２．研究の方法

国立ハンセン病資料館、鹿児島県立図書館及び奄美分館に所蔵されている、和光園関係の資料から、天使園に関するものを探っていくこととした。また、天使園関係者への聞き取り調査、天使園が設けられていた現地調査を行った。さらに、鹿児島県子ども家庭課の協力の

もと、天使園の設立関係の書類の確認をするとともに、設立団体への電話による聞き取り調査を実施した。

３．倫理的配慮

社会福祉の歴史を研究する社会事業史学会の研究倫理指針に基づいた倫理的配慮を施すと同時に、ハンセン病療養所利用者及びその関係者のプライバシーを守るように努めた。

４．研究結果と考察

4.1　国立ハンセン病資料館、鹿児島県立図書館及び奄美分館での資料調査

①国立ハンセン病資料館（東京都東村山市　2020年7月7日訪問）

国立ハンセン病資料館の目的は、「ハンセン病に対する正しい知識の普及啓発による偏見・差別の解消及び患者・元患者とその家族の名誉回復を図ること」としている。[2)]

国立ハンセン病療養所多摩全生園に隣接されており、館内の図書室には、ハンセン病療養所に特化した貴重資料を保管している。新型コロナウィルス感染拡大防止のため、利用に制限がかかるなかであったが、主な資料として以下のものを確認することができた。

『奄美和光園の歩み』国立療養所奄美和光園　1965年3月

『キリスト教ハンセン病救済運動の軌跡』杉山博昭　大学教育出版　2009年3月

②鹿児島県立図書館（鹿児島県鹿児島市　2020年7月28日訪問）及び奄美分館（鹿児島県奄美大島市　2020年9月3日訪問）

鹿児島県立図書館は、鹿児島市役所の近く、鹿児島城に隣接した場所に設けられている。鹿児島県には、和光園のほか、鹿屋市に星塚敬愛園と、2か所のハンセン病療養所があることから、奄美群島に係る資料のほか、ハンセン病関連の図書、資料、和光園に関する資料、奄美大島の歴史に関するもの等もある。奄美大島にある鹿児島県立図書館奄美分館には、和光園、ハンセン病に関する資料が別コーナーを設けて保管されている。主な資料として、以下のものを確認することができた。

『全国ハンセン病療養所内・キリスト教会沿革史』日本ハンセン病者福音宣教協会　1999年4月

『ハンセン病』三宅一志・福原孝浩　寿郎社　2013年

『「いのち」の近代史』藤野豊　かもがわ出版　2001年5月

『近現代日本ハンセン病問題資料集成』藤野豊　不二出版　2004年1月

4.2　訪問・電話による聞き取り調査

①鹿児島県子ども家庭課訪問（2020年7月27日）

天使園設立に際して、監督官庁である鹿児島県庁に、それに関する資料が保管されていないかを確認するため、公文書館の状況を確認してみたところ、鹿児島県には設置されておらず、その理由として「県においては，①戦前の公文書の大部分が戦火等により焼失して現存

していないこと，②戦後の歴史的公文書に該当すると思われる文書のほとんどが県庁地下の文書庫に永久保存されていること，③歴史的公文書の選定基準を設けていないことなどから，公文書館の設置について，まずは歴史的公文書の選定基準の検討や現存している保存文書の把握を含め，各県の対応状況を踏まえながら検討を行いたい」[3)] とのことであった。

そのため、直接、鹿児島県庁の所管課である子ども家庭課を訪ね、天使園に関する資料の現存状況を確認したところ、設立趣意書、廃園関係書類が残されているとのことで、書類の複写を依頼した。

②かのや乳児院（鹿児島県乳児院協議会会長　鹿児島県鹿屋市　2020 年 7 月 29 日）

鹿児島県社会福祉協議会（以下、鹿児島県社協）を訪ね、乳児院協議会の事務局を確認したところ、他の種別協議会の事務局は、鹿児島県社協が管理運営している鹿児島県社会福祉センターに置かれているのであるが、乳児院が、鹿児島市内に２施設、鹿屋市内に１施設の３施設で、その３施設のなかで事務局が持ち回りのようになっているそうで、ここ数十年は、鹿屋市内のかのや乳児院が協議会の会長と事務局を担っているとのことであった。そのため連絡を取り、訪問調査を行った。

聞き取り対象者：社会福祉法人潤心会（かのや乳児院運営団体）理事長　躯川勝　氏
かのや乳児院施設長　躯川恒　氏（鹿児島県乳児院協議会会長）

躯川勝氏からは鹿児島県における乳児院全体の状況について話を聞くとともに、『全国乳児院協議会 50 年誌』に基づいて、天使園に関する説明を受けた。それによると、現在、鹿児島県内には乳児院が３か所であるが、天使園が運営されている時には、6 か所の乳児院があった。全国の乳児院歴史年表において天使園は、1954 年 11 月 1 日に、「奄美和光園」という名称で、ゼローム神父を代表者として記載されている。[4)] その後、「名瀬天使園」になり、井出愛子、水浦ヤエ、原良子、平野キミ、信坂スエ子、井出愛子と代表が変更していき、1992 年 3 月 31 日に廃園となっている。

かのや乳児院の前施設長で、現理事長の躯川勝氏は、医師であった勝氏の父が乳児院を開設する前、1965（昭和 40）年～1968（昭和 43）年の間、奄美児童相談所（大島支庁内厚生課の一部に）に心理判定員として勤務していたそうである。

勝氏によると、天使園は、カトリックの思想によって、和光園で妊娠・出産を認めるという趣旨に沿って設けられたものであったとのことである。和光園には細い川を隔てて、和光園教会が設けてあり、そこからの影響が大きかったものと考えられる。

和光園教会のパトリック神父のもと、ハンセン病未感染児童は、当初、和光園職員とその家族によって私的養育がされていたのである。

そうしたなか、奄美教会のゼローム神父によって、天使園設立の運動が展開されるようになった。和光園で乳児が産まれると連絡が入り、保護し、天使園へと措置していた。乳児から幼児へと成長していくと、天使園から児童養護施設の白百合の寮へと措置変えがされ、当時は高校進学をする子どもはほとんどなく、一般就職をするという流れであったそうである。天使園は、「ショファイユ幼きイエズス修道会」が運営していたとのことであった。

③ショファイユ幼きイエズス修道会への電話による聞き取り調査（2020年8月3日）

聞き取り対象者：管区本部代表役員　南谷豊子　氏

カトリック教にはいくつもの会派がある。以前、築地孤児院についての聞き取り調査を行った際、JR四谷駅前にある幼きイエズス会もカトリック教会であったため、そこへ尋ねてみたところ、「幼きイエズス会」といっても、そことは別の修道会であり、ショファイユ幼きイエズス修道会の所在地（兵庫県宝塚市）、連絡先を教えてもらった。

当初は訪問した上での聞き取り調査をする予定であったが、新型コロナウイルス感染予防対策から、修道会では、外部からの訪問は断っているとのことで、電話での聞き取り調査となった。

名瀬天使園設立の経緯について確認したところ、ゼローム神父の会派とは、ローマカトリックとしては同じものであるが、別々の組織であるとのことである。1951（昭和26）年にフランシスコ修道会修道士が、奄美大島へと来島し、1953（昭和28）年、奄美大島が日本への本土復帰をした年に、ゼローム神父たちが奄美大島の西仲勝に、貧困地域を対象とした診療所を開設したとのことである。

和光園の当時の大西園長と松原事務長は、ともにカトリック信者で、とても信頼関係も厚かったようで、和光園ででも「子どもを産んでもらおう」という信念のもと、和光園入所患者から未感染児童が生まれたそうである。

天使園創設に強く関わったゼローム神父は「奄美の父」といわれていたそうで、ハンセン病についても「アメリカではうつる病気ではない」「神経をやられるだけ」「きちんと隔離すればいい」「中絶、断種は人道的ではない」という思想のもと、尽力してくれたとのことである。また、奄美大島にはカトリック信者も多く、ローマカトリックでは「中絶はいけない」こととされていたことも、和光園での妊娠・出産を後押ししてくれたのであろう。

1955（昭和30）年頃までには、ハンセン病未感染児童を延べ52～3人は預かったいたそうで、途中から、ハンセン病未感染児童以外の一般児童も受け入れたそうである。

当時、和光園で出産があると、同時に、天使園へと連れてきたそうである。そして、措置児童が4人くらいになったときに、天使園としての使命が終わったということで、1992（平成4）年3月に閉園となる。閉園後の跡地には高齢者在宅支援センターが設けられ、教会の側の修道院と繋がっているとのことであった。

④天使園跡地訪問（2020年9月2・4日）

聞き取り対象者：特別養護老人ホームめぐみの園　施設長　永田博道　氏

奄美大島の西仲勝は、中心街から車で20分くらいの場所にあり、山間部の集落である。道路沿いにカトリック西仲勝教会があり、隣接して在宅福祉センター、修道院が設けられている。側道の奥には、特別養護老人ホームめぐみの園があり、天使園を運営していた社会福祉法人が運営している。

永田氏によると、奄美大島における大熊小教区でのパトリック神父の尽力により、名瀬天

使園が創設されたとのことである。和光園の事務長であった松原若安氏とその娘たちが、当初、ハンセン病未感染児童の養育をしていた。出産は松原宅で、養育は天使園でという段取りであったようである。

図 1:奄美群島と沖縄県との位置関係 http://amami-inet.com/eco/about-amami/

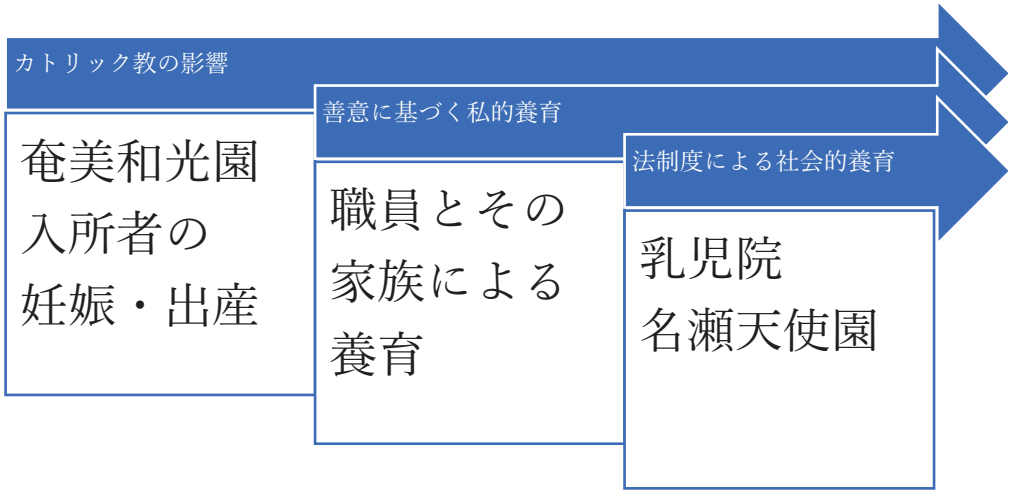
図２：奄美大島地図と天使園跡地
https://www.google.com/search?q=%E5%A5%84%E7%BE%8E%E5%A4%A7%E5%B3%B6+%E5%9C%B0%E5%9B%B3&tbm=isch&source=iu&ictx=1&fir=hPN23o6wa-IWfM%252CPoA-APAiI5DSMM%252C_&vet=1&usg=AI4_-kQlw0H1b7P3rgC5IqXuVry1aLaMRA&sa=X&ved=2ahUKEwiUq4-V09nsAhVUNKYKHfhwCjgQ9QF6BAgKEDs&biw=1920&bih=1089#imgrc=TzM2VQVfWR4kJM

天使園の職員は、シスターが中心ではあったが、それ以外にも一般の職員も勤務していたそうである。天使園がこの場所に設置されたのは、修道院が西仲勝にあったからで、天使園の創設は、1960（昭和 35）年５月１日であった。名瀬地区にあった診療所のカトリック信者であった永田医師が、天使園に週に何度か往診に来てくれていて、看護師もカトリック信者であったそうである。

さらに、永田氏は、修道院に連絡を取ってくれて、当時、天使園で勤務していたシスター山口からも聞き取りをすることができた。

山口氏は、天使園に 1975（昭和 50）～1982（昭和 57）年の間、勤務していたそうである。当初は、調理の手伝いをしていたが、そのうち、子ども達の養育にも関わるようになって、２～３年、夜勤もしていたそうである。

図３：奄美和光園における出産後の養育の流れ



当時の天使園には、入所している子どもたちは、10～20 人程度程度のこじんまりとした施設だったそうである。和光園の入所患者も、車で 30 分以上離れた天使園に、自分の子どもの面会に来ていたそうであるが、園内に入ることはなく、外から自身の子どもの様子をそっと見て帰るというものだったそうである。天使園の子どもは、2 歳まで養育されると、奄美大島の児童養護施設、白百合の寮へ引き渡されていったとのことである。

保母（現、保育士）さんが中心となり、当直は１名体制で、夜間のミルク、おむつ交換等を行っていたとのことである。天使園の職員の中で、シスターは１～３人程度で、あとは地元在住の職員と半々くらいで、名瀬、西仲勝、仲勝在住の住民であった。

園の日課としては、近隣の小湊方面へ海水浴、園庭で運動会等も行われており、一般の乳児院と変わりない生活を行っていたようである。閉園にいたった要因としては、和光園の入所者が高齢となり、和光園からの乳児はもう来ないとのことで、天使園は閉園となったとのことである。

５．まとめにかえて（今後の課題）

奄美大島にある和光園では、他のハンセン病療養所では認められていなかった妊娠・出産ができた。その背景には、アメリカ軍による統治下、カトリック教の影響が大きかったということが確認できた。出産後に、私的養育をされていたということも、他の先行研究等でも検証されている。[5)]

本研究は、和光園職員、その家族による私的養育から、社会的養育である天使園創設に係る聞き取り調査であった。調査によって、私的養育の際にはパトリック神父が、社会的養育にはゼローム神父というように、カトリック教の影響を大きく受けていることが確認できた。また、天使園創設後の運営に関しては、ショファイユ幼きイエズス会が関わり、シスターを中心にそれが行われたこと、和光園の入所者が高齢となり、和光園からの子どもが措置されてこなくなったことによって、その使命を終えたことで閉園となったことが確認できた。

今後の課題としては、以下の点があげられる。

ⅰ）戦後のアメリカ統治と奄美大島の日本復帰と和光園の運営

ⅱ）天使園設立趣意書、閉園関係書類の確認

ⅲ）ショファイユ幼きイエズス会への聞き取り調査

こうした課題に取り組むことによって、天使園の存在意義と、差別・偏見のない社会づくりの手がかりを掴んでいくことに努めたい。

【参考文献】

１）小倉常明　「（旧）優生保護法下におけるハンセン病患者の出産の子育て支援」『東京通信大学研究紀要第二号』

２）国立ハンセン病資料館ホームページ　http://www.hansen-dis.jp/　2020 年 9 月 1 日閲覧

３）公文書館等未設置における検討状況等
http://www.archives.go.jp/information/pdf/h25/shiryou3-65.pdf　2020 年 9 月 1 日閲覧

４）『全国乳児院協議会 50 周年誌』全国乳児院協議会

５）瀬戸口祐二「優生保護法下で生まれたハンセン病患者の子どもたち」『名寄市立大学社会福祉学科研究紀要第 1 号』や、森山一隆他「ハンセン病患者から生まれた子供たち」『日本ハンセン病学会誌 78 号』等でも検証されている。

小倉 常明（おぐら つねあき）　東京通信大学 人間福祉学部 准教授